

豊田市民芸館だより



鈴木繁男装幀『工芸』第100号（『工芸』屏風・部文）1939年 23.0×15.0cm 日本民藝館蔵

目次

- ・企画展「海のシルクロード 緋の道」
記念講演会「写真紀行 緋の道 インド、
インドネシア、そして沖縄」報告 2頁
作品紹介 3頁
- ・展覧会予告 企画展「鈴木繁男 手と眼の創作」4・5頁
- ・本多記念民芸の森から 6頁
- ・令和6年度事業報告 7頁
- ・民芸館からのお知らせ 8頁

第39号

記念講演会「写真紀行 緋の道 インド、インドネシア、そして沖縄」報告

当館では9月21日（日）まで企画展「海のシルクロード 緋の道」を開催しています。この展覧会では、染織技法である先染めの緋に焦点を当て、その伝播ルートとともに世界の緋を紹介しています。

7月19日（土）に開催した記念講演会では、本展出品作をコレクションした故・藤本均の蒐集について、ご子息である写真家・藤本巧氏にお話しいただき、また、氏の取材活動についてもあわせてご講演いただきました。

最初に、富山弘基（『日本の伝統織物』の著者で、染織関係の出版事業に広く関わる）と藤本均による対談（『The あんていーく』読売新聞社）の音声テープが、氏のご自宅から発見されたことを受け、その貴重な肉声の音源を聞きながら、どのように蒐集へと導かれたのか、その経緯をたどりしました。

藤本均は、江戸時代より続く島根県の出雲大社の木工職人の家に生まれました。素封家・23代田部長右衛門によって創設された松江美術工芸研究所（1946年から1948年にかけて2年間開校）に在籍し、松江に疎開していた陶芸家・河井寛次郎（島根県安来出身）から民藝について教わりました。同級生には、金津滋（工芸家・茶人）や鈴木尚夫（美術評論家、倉敷・大阪日本民芸館の学芸員）がいます。大阪で商売（顔料）を学んで独立し、若い頃からの念願だった手仕事の店「三彩工芸」を設立、工芸作家の作品を取り扱うかたわら、世界の布も蒐集しました。特に緋については、柳宗悦の「緋美について」（『民藝』82号、1959年）を読んで啓発され、地元である出雲緋の蒐集を始めるようになりました。



講演会

沖縄県那覇市で開催された日本民藝協会全国大会に出席した際に、平和市場の店主と知り合って布を送ってもらうなどして、沖縄の染織品をも豊かにしていきました。そして、日本の緋コレクションが充実してきたことで、次第に世界へと目を向けるようになりました。

『緋の道』（毎日新聞社、1984年）の発行が決定すると、輸入商社を通してさらに世界の緋を充実させました。巧氏はこの書籍発行の準備のため、インドとインドネシア、沖縄を取材。アジャンタ石窟壁画の撮影を始めとしたインド取材では、オリッサ州の村の人々が緋の仕事に従事する様子、パトラサリーを織るグジャラート州パタンの工房など、氏のユーモアある話と写真を交えてご紹介いただきました。また、染色家・岡村吉右衛門らのインドネシア（ティモール島とサブ島）のフィールドワークに氏が同行した際には、新しいものばかりで草木染めの緋は作られていなかったと感じ、この時すでに現地で良いものを手に入れるのは難しかったとの話をされました。それら取材の様子を紹介した「藤本巧写真紀行 緋の道 インド、インドネシア、そして沖縄」の出展写真は、本当に貴重な記録であると再認識し、経済発展を遂げたことによる手仕事の衰退や、昨今の不穏な情勢が及ぼす手仕事への影響など、改めて考える契機となりました。

「収集いろは加留多」（『The骨董』第5集、読売新聞社、1985年第4刷）には、その蒐集について「伊万里の次は、手前織と呼ばれる、自家用のために心を込めて織られた田舎の木綿縞や格子、緋や絞りの類であった。そのころ初めて洗いざらされた藍の色の美しさを知った。」とあります。山陰地方ではどこの家庭でも手前織の布を大切にしていた、当初、高祖母の織った布が実家にあったものの、なかなか貰うことができなかった、とのことでした。島根や鳥取の山陰の絵緋中心の蒐集だったものが、次第に木綿を主とした庶民の緋へと幅を広げ、昭和39年（1964）

作品介绍

参考文献：

『藤本均コレクション 絣の道』毎日新聞社（1984年）

福田浩子「資料紹介 当館蔵（ビップ・ラウ氏旧蔵）イカット・コレクションについて（2）—中央アジア、ウズベクの絣—」『広島県立美術館研究紀要』第5号（2001年）

写真提供：藤本巧

「もの言わぬ絣ですが、その織り目から、愛情と献身に明け暮れた織り人たちの姿が、浮かび上がってくるように思えます。」（藤本均「あとがき」『絣の道』）。

民衆が織り成す絣に魅せられた、たった1人の人物の蒐集による本展は、日本の作品だけでなく世界の絣まで網羅されています。インドや東南アジアはもちろん、中央アジアの絣も充実していることに驚嘆し、展示作業の際には何度もその美しさに目を奪われました。そして、その中には、裏地へのこだわりまで感じ取れる作品がありましたので、写真とともにご紹介します。

①絹・ビロード絣衣服 アフガニスタン 19世紀
116.0×150.0cm



②幾何文経絹緯木綿経絣チャパン（衣服）
トルキスタン（アフガニスタン）
148.0×110.0cm



③幾何文経絣衣服 ウズベキスタン
120.0×142.0cm



④幾何文経絹緯木綿経絣敷布（部分）
トルキスタン（アフガニスタン）
216.0×143.0cm



⑤幾何文経絹緯木綿経絣敷布（部分）
トルキスタン（アフガニスタン）
204.0×160.0cm



④の作品の裏地は更紗です。インドの産でしょうか、粗目の平織り木綿にブロックプリントが施されています。それ以外は、いずれも機械捺染（ローラープリント）によるものです。18世紀半ば、イギリスに始まった産業革命でプリント技術が発明され、特に質の高いイギリスのプリント布は、ヨーロッパやアフリカまで輸出されました。19世紀後半、ロシアでも産業革命が起こり、プリント布が生産されましたが、イギリスのものほど良質ではなかったためヨーロッパでは流通せず、ロシアは中央アジアへと販路を広げました。ここに見られる裏地もこうした経緯で流通したロシア産のものと考えられ、どの作品も表と裏地の色味をうまく取り合わせて仕立てられていました。これら表地の絣は、いずれも工房の熟練した織り手によって作られたものですが、安価な輸入織物に対抗できず、特に①のような、鮮やかな草木染めの多色絣や、富の象徴でもあった贅沢なビロード地の絣は、次第に生産されなくなりました。（岩間 千秋）

企画展「鈴木繁男 手と眼の創作」

2025年10月11日から2026年1月12日までの会期で「鈴木繁男 手と眼の創作」展を開催します。鈴木繁男（1914－2003）は民藝運動の主唱者である柳宗悦の唯一の内弟子で、柳から直接工芸や直感についての指導を受けました。展覧会のサブタイトルになっている「手と眼の創作」とは、秀逸な技巧を我がものとした工芸作家としての側面だけではなく、鋭い鑑識眼を具えた蒐集家としての鈴木にも光を当てようとすることを含意するものです。とはいえ、鈴木繁男の認知度は高いとは言えないでしょう。展覧会が始まる前に、まずはその人物像をご紹介します。

鈴木は、1914（大正3）年に静岡県静岡市に生まれました。父は金蒔絵師で、小学生のころから漆技を仕込まれ、自身も絵を描くことを好んでいたようです。14歳のとき、通っていた商業学校を家庭の事情により3年で中退することを余儀なくされますが、かえって自由に自分の将来の夢を描けると画家を志すも、やはり事情が許さなかったようです。

そんな中、17歳の頃に静岡の商工奨励館で催されたデザインコンクールで一等を受けることができました。また、その後まもなく柳宗悦の『工藝の道』を読んで感銘を受けたり、高句麗古墳通溝壁画の図録を見て強く惹かれたり、そのほか建築、バウハウスなどに関心を持ったりと、この時期の鈴木は、自身の将来を模索しつつも進むべき道が漠然と見えていたようです。

1935（昭和10）年、21歳の時に、精神科医で民藝にも造詣が深く、当時静岡で病院長をしていた式場隆三郎が主催した「ゴッホ複製画展覧会」を見て感激し、会期中に何度も通うなかで式場と懇意になり自宅に招かれました。そこで見た式場の工芸品のコレクションにこれもまた感激し、帰宅後にその印象を和紙に漆で描き、後日、式場にそれを見せると、式場はそれを持って上京、柳に見せたのでした。

それからしばらく経ったある日、立派な封書が届き、裏には柳宗悦と書かれていました。開けてみると「是非会いたい待つ」と記されていたのです。さらに、まだ面識のない濱田庄司から自作の陶器が茶箱ひと箱分送られてきました。前後して届いた葉書には「私の二番手の物だが宜しければ台所でお使い下さい」と書かれていたそうです。同年の8月には、浜松で開催された「染織講習会」で芹沢銈介と初めて出会ってもいます。この年の春から夏にかけて、民藝運動の錚々たる



色絵草花文皿 素地＝壺屋 絵付＝（鎌田・芹沢工房）1939年
8.6×32.2cm 日本民藝館蔵

面々との関わりが突然始まりました。

そしてついに、鈴木は故郷を離れ上京し、柳家の門を叩きました。同年の秋も深まった頃でした。招じ入れられた玄関の壁に見たのは通溝壁画の写真で、鈴木は「この先生もか……」と驚きを持ったと述懐しています。二階の三畳間を与えられて、柳家で「修行」が始まりましたが、柳は早々に鈴木を持ち物（書物）を取り上げ、「君はこれから、民藝ということ勉強するのだが、本を読むより先にすることがあるんだよ。すべて行動が先なのだ。」とか「私の書いたものを本当にわかろうとするならば、まず読むより先に行動を起こさなきゃならんよ。」などと言われたそうです。

その柳の教育の仕方といえば、自身の持つ品々を突然鈴木に見せて、その様子を観察します。鈴木が黙って見ていると「君は反応が遅いよ」と一喝。「僕が君の前に物を出したら、すぐに間髪を入れずに反応なさい。」というものだったようです。こういった教育と並行して、鈴木は開館間近の日本民藝館の陳列ケースや展示台への拭漆塗りの作業を任されました。この年は鈴木にとってまさに人生の転機となる年でした。

1936（昭和11）年、日本民藝館が開館すると、鈴木は柳家から民藝館に隣接する家屋へ移りました。同年、柳の勧めで益子の濱田庄司を訪問し、一泊二日の滞在ながらその制作に関わる知性やエネルギーなど生涯忘れ得ぬ強い印象を受けて帰ってきました。翌37（昭和12）年には柳の指示で、当時蒲田にあった芹沢の工房で模様について学びました。蒲田では柳の甥の柳悦孝と柳悦博の兄弟、岡村吉右衛門らと親交も深めました。この頃から雑誌『工藝』の表紙を制作するようになります。漆によるもので、素材の性質上静岡の実家に戻り、その仕事場でほぼ2年間制作を続けました。この

間、自身が蒐集した江戸時代の厨子が日本民藝館の所蔵となるなど、柳に教育された「眼」の成果も生まれはじめました。

1941（昭和16）年には、同じく柳の指示で岩手県胆沢郡衣川村増沢に移り、県の嘱託として南部碗の文様生成過程の調査研究と、その実習を行いました。当初、自身の望む漆工との食い違いに悩みながらも、「筆先ぐらいのことではどうにもならない」ということを経験したと述懐しています。増沢にはその後断続的に滞在し、その間盛岡の光原社で鉢、盆、碗、箱などへ漆絵を描いています。そして光原社で仕事中の1944（昭和19）年2月に召集されました。翌年、鹿児島県出水航空基地にて敗戦を迎え、10月に出水から日本民藝館へ直行すると柳は病床にあり、日本民藝館の再開を託されました。戦禍を避けるために埋蔵されていた民藝館の所蔵品を単身回収し、12月には日本民藝館を再開させました。

1948（昭和23）年、34歳の年の11月、小学校教諭として働く大箸ふさと結婚、静岡県磐田市に居を構えます。翌年、長男が生まれるなど生活が充実するのと並行して制作も活発になり、1950（昭和25）年には久能団扇の復興に成功したり、小間絵制作を始めたり、あるいは葛布工場で染料の改善を試みたり、針裂葛布を制作したりなど多岐にわたる活動を行っています。1952（昭和27）年には鈴木指導による葛布関連の展覧会が東京・たくみ工藝店で開催され、その翌年にはそのたくみ工藝店の山本正三とともに愛媛県砥部を訪れ、梅野精陶所の梅野武之助と出会いました。この頃から遠州森山窯で絵付けなど行う一方、自宅に手轆轤を据え、成形の修練も積みます。11月にはバーナード・リーチの助手を3週間務める機会があり、作陶の決意を固めました。



鈴木繁男蒐集 厨子 江戸時代 30.0×18.0×13.5cm
日本民藝館蔵

そして翌1954（昭和29）年、まずは自宅に上絵用の錦窯を築きます。会津本郷窯瀧田頂一の素地に錦窯で絵付けを施した初めての作をたくみ工藝店で展示しました。1955（昭和30）年には、濱田庄司の勧めで愛媛県の嘱託となり、砥部諸窯に絵付けの指導を行っています。翌年には砥部を訪れた富本憲吉とも親交を深めました。1958（昭和33）年には、六代・水野半次郎の瀬戸本業窯を訪れています。多くの人との出会い、そして助言を得て、1960年、自宅に丸窯と登窯の中間の小さな窯（磐田窯）を築き、本格的な作陶を開始しました。ただ、残念なことに、鈴木陶作品の出来栄を見届けた恩師柳宗悦が翌1961（昭和36）年に歿しました（享年72歳）。21歳で弟子入りした鈴木は47歳になっていました。

50代になった鈴木は制作の傍ら、さまざまな展示を担当することになります。1965（昭和40）年には6月に開館した富山市民芸館、1968（昭和43）年には神奈川県立博物館での「日本民藝館展」、そして1970（昭和45）年の日本万国博覧会（大阪万博）においては日本民藝館の展示を担当します。制作も充実し、鈴木指導による梅野精陶所作白磁大皿が日本民藝館賞を受けるなど受賞も重ねていましたが、1973（昭和48）年、59歳の年に、磐田窯の増築作業中に大怪我を負い、医師の指示により作陶を断念することになります。もっとも創作に関わる意欲が衰えることはなく、1974（昭和49）年には濱田自身の依頼により「濱田庄司・目と手展」の展示を担当。他にも多くの展示を担当、さらには講習会、研究会で講師を務め後進を指導したり、各地の諸窯を訪れて図案作成に協力したりなど、精力的な活動を続けました。また、日本民藝館を始め、民藝関係のさまざまな団体の役職にも就き、民藝運動の発展に力を注ぎました。

そして1993年（平成5）年、79歳の年に、大阪日本民芸館で「鈴木繁男作品展」が開催され、同時に『鈴木繁男作品集』も出版されます。鈴木陶の創作活動の全体像を紹介する集大成的な展覧会でした。それを機に、80歳になった鈴木は自分が就いていた多くの役職を辞し、民藝運動の展開を後進に託します。そして2003（平成15）年、磐田市の自宅で息を引き取りました。89年の人生でした。一人の生涯にこれだけ多彩な創作活動を展開させた人がどれだけいるのでしょうか、鈴木繁男は間違いなく「天賦の才」の持ち主だったと言えると思います。この展覧会で皆さんも鈴木陶の才能の一端にぜひ触れてみてください。（北谷 正雄）

本多記念民芸の森から

2024年度後期以降のイベントのふりかえり

○市民文化講座 青佳談義（第13回）

令和7年3月1日（土）参加者：30人

NPO法人民芸の森倶楽部と共催で「民芸」や「本多静雄氏」について知りたい方、学びたい方を対象とした講座「青佳談義」を開催しました。

第13回目は豊田市博物館の永田学芸員から「猿投古窯と中世陶器への影響」と題した話を伺いました。

熱心にメモを取る参加者の姿などが見られました。



○初夏、森の手ざわり2025

令和7年5月18日（日）参加者：約550人

今年は「新緑と響きあう 心和むひとときを」をテーマに、NPO法人民芸の森倶楽部の企画運営で開催しました。

狂言舞台では杜若高校生による吹奏楽や合唱、キッズダンス等の披露があり、大いに盛り上がりました。敷地内では民芸館講座受講生等による作品展示や販売会もあり、丁寧に作られた手作りの作品を来場者が買い求めていました。また、飲食物の提供などを行い、地域住民の交流や憩いの場となりました。



○夏休み企画「ガラス風鈴に和紙で絵付けをしよう」

令和7年7月19日（土）～ 限定150個

毎年大好評企画のガラス風鈴の絵付け。

今年は豊田市博物館で開催中の特別展「古代エジプト展」とのコラボ企画としてパピルス紙を使って絵付けを楽しんでもらいました。参加者は風鈴のガラス面や短冊に小原和紙やパピルスを使い、思い思いに貼り付けて自分だけの風鈴を完成させました。

民芸の森に完成した風鈴の「チリンチリン」と軽やかな音が響き、涼しさを感じることができました。



○森の本多コレクション展「冬ナクバ 春ナキニ 春・初夏を感じる本多静雄の蒐集品」

令和7年4月5日（土）～ 6月15日（日）

「冬ナクバ 春ナキニ」は、思想家・柳宗悦の言葉です。冬の厳しい寒さを乗り越えると春がやってくるように、辛いことに耐えなければ、よいことも訪れないという意味です。本多静雄は、そんな春に思いを馳せ、自邸敷地を開放して「陶器と桜を観る会（観桜会）」を毎年春に開催しました。昭和31年から平成11年の間、44年にもわたって行われたこの催しでは、桜の花見とともに、猿投窯など自身のコレクションを公開しました。本展では、本多と親交を結んだ画家の杉本健吉や我妻碧宇、瀬戸の陶芸家による作品や、石皿・行灯皿といった江戸時代のうつわなど、春や初夏を題材にした作品を紹介し、その多岐にわたる蒐集品をとおして、本多の業績を再確認しました。



令和6年度事業報告

■民芸館

年間入館者数

令和6年度 58,776人／309日開館
(5年度 56,988人／311日開館)

企画展・特別常設展

企画展3回、特別展3回開催しました。
各展覧会では、ギャラリートーク、体験、講演会などを開催しました。

◎企画展

「美しき手仕事－新収蔵品を中心に」

(第1・2民芸館)

会 期 4月9日～6月30日
入 館 者 2,850人(74日間)



◎企画展

「アイヌの生活－高松コレクションを中心に」

(第3民芸館)

会 期 10月12日～12月15日
入 館 者 5,698人(58日間)

◎企画展「郷土玩具展 干支と巳」

(第3民芸館)

会 期 12月21日～2月2日
入 館 者 1,364人(32日間)

◎その他「講座作品展」

(第3民芸館)

会 期 2月18日～5月18日
入 館 者 7,173人(80日間)

◎特別展

「或る賞鑑家の眼－大久保裕司の蒐集品」

(第1・2民芸館)

会 期 7月13日～9月23日
入 館 者 2,439人(66日間)
関連企画 ギャラリートーク、関連本販売



◎特別展 *日本民藝館からの巡回展

「アイヌの美しき手仕事」

(第1・2民芸館)

会 期 10月12日～12月15日
入 館 者 5,297人(58日間)
関連企画 講演会、関連グッズ販売
ワークショップ



◎特別展

「おいしい民窯－食のうつわ－」

(第1・2民芸館)

会 期 1月11日～令和7年5月25日
令和6年度分
入 館 者 3,453人(69日間)
関連企画 講演会、陶器販売



民芸館講座開催

各種工芸講座を開催しました。

◎連続講座

穴窯陶芸(10回) 46人 ガス窯陶芸(34回) 401人
染織 (29回) 282人 絞り染め (30回) 266人
拳母木綿(86回) 546人 トンボ玉 (70回) 474人

◎体験講座

ガス窯29回 穴窯7回 糸紡ぎ・機織り2回 絞り
染め1回 トンボ玉4回 裂織4回 合計679人

◎団体、出前講座

ガス窯陶芸8団体 絞り染め3団体 合計171人

◎民芸体験等

一閑張り2回、しめ縄作り1回、特別展関連企画2回
合計42人

イベント

「平戸橋桜まつり」4月6日 来場者 7,000人

刊 行 物

「民芸館だより」第37号・第38号

資料収集

◎購入資料

溜塗麻布貼小判桶、黒漆盤など 4件4点

◎寄贈資料

アイヌ民具、バーナード・リーチ素描など 62件548点
収蔵総数 12,615件 57,773点(令和7年3月末)

■本多記念民芸の森

年間入場者数

令和6年度 19,129人／309日間
(5年度 18,352人／311日間)

企画展

森のコレクション展 2回

「本多静雄の眼」

「本多静雄と外国の蒐集 楽しい動物のもよう」

森のアート展 2回

「ゆきて たずねる こえ 植村宏木展」

「揺れ動く輪郭－動的平衡 神尾和直」

会 期 4月4日～3月23日

入館者 9,928人(261日間)

イベント

「初夏、森の手ざわり」5月19日 来場者 550人

「観月会」10月19日 来場者 624人

体験ワークショップ

「こま犬を作って飾ろう」ほか 8回

アート展ワークショップ 2回

参加者 520人

民芸館からのお知らせ

① おにぎり・いなり寿司を販売しています

豊田市下山産のお米「ミネアサヒ」は水と空気のきれいな場所で作られていて、一般にあまり流通していないため、幻のお米といわれています。当館ではこのお米を使用したおにぎりやいなり寿司を、今年度は毎月2回、第3民芸館にて販売しています。展覧会をご覧になるとともに、こちらのお弁当もぜひご利用ください。販売日や詳細はホームページでお知らせしています。



② ふたつのコレクション展

「芹沢銈介の仕事」(第1民芸館)

「本多静雄と杉本健吉」(第2民芸館)を開催します

期間：令和8年2月7日(土)～5月24日(日)

日本を代表する染色家・芹沢銈介(1895-1984)の作品を展示します。芹沢は柳宗悦の著作「工藝の道」に感銘を受け、民藝運動に参加し柳の著作の装丁を数多く手がけるなど、民藝運動を代表する作家のひとりです。

芹沢は型染の工程である「下絵・型彫り・染め」をすべて一人で行う「型絵染」を確立し、人間国宝に認定されました。生誕130年を迎えた芹沢銈介の仕事を今回は、館蔵品の中から厳選してご紹介します。

また同時開催として、「本多静雄と杉本健吉」を展覧します。豊田市名誉市民で実業家、日本有数の古陶磁研究家として知られる本多静雄(1898-1999)と名古屋市出身の画家・杉本健吉(1905-2004)。本展では、杉本の絵画をはじめ、杉本が手掛けた本多主催の茶会や創作狂言にまつわる作品など、二人の深い交流と文化活動に焦点をあてて展示をおこないます。

「生きることは描くこと」と言う杉本健吉。ふたりは愛知県立工業学校(現・県立愛知総合工科高校)の同窓であり、8歳年下の杉本は本多との交流から多くの作品を生み出しました。一方、本多は杉本美術館(2021年に閉館)の開館にあたり、初代館長を引き受けるなど生涯にわたって杉本との親交を深めました。己の興味、関心の向くままに互いの創作意欲を高め合いながら、健やかに歳を重ねたふたりの半生にも注目してください。



杉本健吉 社頭蓮池 1979年 豊田市蔵

お問い合わせ 豊田市民芸館

〒470-0331 愛知県豊田市平戸橋町波岩86-100

TEL 0565-45-4039 FAX 0565-46-2588

休館日 月曜日(休日の場合は開館)

開館時間 午前9時30分～午後5時

入館料 無料(有料展あり)

<https://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/>

豊田市本多記念民芸の森

〒470-0331

豊田市平戸橋町石平60-1

TEL 0565-46-0001

